

佐藤優氏は膨大な本を著し、右、左に関わりなく諸々の雑誌に寄稿している。驚くべき筆力である。インプットする量は桁外れで、知性に圧倒される。佐藤氏は外交官としてインテリジェンスに深く関わり、事に動じない人のように思える。その佐藤氏が「戦慄した」という、グレン・グリーンウォルド著『暴露 スノーデンが私に託したファイル』を恐れをもって読んだ。

エドワード・スノーデンは国家安全保障局（NSA）と中央情報局（CIA）という合衆国の二大情報機関に籍を置く人物である。彼は米国の膨大な最高機密文書をジャーナリストのグリーンウォルドに託した。監視、情報収集国家アメリカの恐るべき実態がグリーンウォルドを通して、白日の下に晒された。世界は、殊に米国は、それこそ「戦慄」しただろう。007のジェームズ・ボンドのような活劇と美女はないが、緊張溢れる二人の出会いから書き始めている。これは映画ではない、今起こっている事実の出来事である。

スノーデンはアメリカ政府を内部告発した理由を下記のように語っている。「これらの情報を公開することが、私の人生の終焉を意味していることも。しかし、愛するこの世界を支配している国家の秘密法、不適切な看過、抗えないほどの強力な行政権といったものが、たった一瞬であれ、白日の下にさらされるのであれば、それで満足です。……彼らが恐れるのは光です」。

コンピューター操作、アメリカ政府の構造、報道機関のあり方などが分からないので、私には理解できない点が多かった。しかし、権力はここまでののかと恐怖を感じた。アメリカ帝国主義と言われて久しいが、報道機関を抱き込み、プライバシー権を問題にせず、個人情報権は権力の手の中に握られてしまっている。9・11の「同時多発テロ」以来、テロ捜査を言い訳に、何でもありの形になっている。「悪いことをしなければ、知られても構わない」という声もある。思想性、給与、病歴、性生活など、あらゆる面で知られ、監視されると、権力にすり寄り、異議申し立てや反対することが困難になる。

情報収集能力は飛躍的に高く、同盟、友好国の首脳の電話も盗聴されている。ドイツのメルケル首相は憤り、ブッシュ大統領に厳しく抗議していた。国際会議が持たれるが、詩編139編4節に「わたしの舌がひと言も語らぬさきに 主よ、あなたはすべてを知っておられる」とあるが、他国が何を言うかを盗聴によって、既に知ってしまった訳である。アメリカは中国のコンピューター妨害に抗議していたが、アメリカこそが情報収集のためのネットを世界に張り巡らしている。強大な権力と優れたテクノロジーを持つと、こうも傲慢になるのかと唖然とする。『暴露』には、情報が徹底的に収集されていると書いているが、その内容については明らかにされていない。

行政、立法、司法、報道の「四権」という考え方の下、報道は政府の透明性を確保し、職権乱用を抑制する機能を持っている。ところが、アメリカの報道機関のスノーデンに対する追及は厳しく、グリーンウォルドに対しても、国家機密漏えい幫助の罪を負わせようとしているという。内部告発者を保護するのが現代の常識ではないか。アメリカ帝国の権力は個人を抹殺している。スノーデンは良心にかけ死を賭して、これを言いたいのである。

日本の安倍政権の横暴は目にあまる。権力が集中してく状況が危険である。特別秘密保護法案が発動されると、国民の知る権利、自分自身の自由はかき消されていく。この恐怖に闘えるであろうか。